後水尾院サロンと宮庭庭園の展開

Emperor Gomizunoo's Salon and the Progress of its Gardens

町田 香*

Kaori MACHIDA

Abstract : The Imperial gardens in early modern times in Japan, such as Katsura Imperial Villa and Shugakuin Imperial Villa, were a product of the Kanei culture that flourished among the court, samurai, and townsmen elite. This paper explains how the salon of Emperor Gomizunoo presented the creative foundation for the Imperial gardens.

Fifty years of the cultural activities of the Gomizunoo's Salon are studied as for the type of activity, attending members, and places where it took place. With changing cultural activities of the salon, the garden progresses as a place for play. With the aging of Emperor Gomizunoo, above all after his retirement, the cultural activities of his salon focussed on an increasing variety of all kinds of merrymaking. With it the gardens differentiated. The Shugakuin Villa became the most complete place for the Imperial merrymaking.

Keywords: *The Imperial gardens, Former Emperor Gomizunoo, The Cultural Salon, The Imperial merrymaking*

キーワード：宮庭庭園，後水尾院，文化サロン，遊興

1. 背景と目的

庭園史上、近世初期は桂離宮や修学院離宮などの宮庭庭園が興隆した時代である。そして、これらの宮庭庭園は近世初期の文化的動向として提唱されている寛永文化と共に語られることが多かった。寛永文化は、宮廷文化、上層町衆文化、武士文化を中心として構成され、中でも宮庭庭園の創造基盤である宮廷文化は、後水尾院の宮廷文化サロンを中心に論じられてきた¹⁾。

従来、一般的に認識されている後水尾院サロンとは、「歴代天皇の中でも好学として著名な後水尾上皇が、皇族・公家衆を啓発して伝統文化の振興を巻き起こす中で、後水尾院中心に、古典文学・歌学・能筆・茶道・立花・楽、その他の伝統芸術すべてにわたって、意欲的に活躍した後水尾院を囲む文化創造集団」といえる。また、後水尾院サロンの活動の典型像は、「仙洞御所や修学院離宮などを場とし、御茶屋にて茶を服した後に、宴が舟上や池中の中島、また御茶屋などあちらこちらをめぐりながら、酒肴を食し、詠歌や謡・双六、将棋など様々な伝統文化のお遊びが繰り広げられた」というものであろう²⁾。

しかし、後水尾院サロンとは50年程にわたって展開したものであり、その期間は後水尾院の30代から80代にあたり、その節々でサロンのあり方は、後水尾院の興味や心情だけでなく、社会や時代の影響を受け変化していった。同時にサロンの構成員も世代交代と共に大きく入れ替わることになり、サロン活動の場も、長い年月の間に造営・改修・火災等による廃絶を繰り返していく。サロン活動の舞台とされる庭園も様々な役割が必要とされ、多様化していったと考えられる。

本研究では、まず後水尾院サロンの文化活動を、文化活動の内容・構成員・活動場所の三要素から捉え、サロン活動の変遷を明らかにする。後水尾院サロンの文化活動の変遷を時系列的に捉えると同時に、その時ごとにサロンの文化活動の中で庭園が担っていた役割を考察する。それによって、宮庭庭園の展開過程を明らかにしていく。

2. 天皇時代における文化活動の特質とサロン形成の萌芽

後水尾天皇は、後陽成天皇（在位1586～1611年）の第三皇子として文禄5年（1596）6月4日に生まれた。

後水尾天皇の在位（1611～1629年）した時代は、幕藩体制が徐々に整えられる時期であり、確固たる武家政治を樹立しようとする幕府は、元和元年（1615）の禁中並公家諸法度、同6年（1620）の徳川和子入内、寛永4年（1627）紫衣事件等、武力と経済力を背景に朝廷の政治的権威を抑えていった。こうした幕府との確執の中で、後水尾院は朝廷の権威を文化芸能の世界に求め、後水尾院の宮廷文化サロンへと展開していくことになる。

まず後水尾院サロン形成以前の、天皇時代における文化活動の特色を示す。禁裏における後水尾天皇独自の文化活動を明らかにしたところ、すでに文化サロンの基盤を形成していたことがわかった。

後水尾天皇の文化活動の特質の第一は、毎月の諸芸能の稽古日時と参加者を定めたこと、つまり、稽古御会の式日化である。時間割と稽古御会の人員が規定され、指導的立場の者が稽古を進行していた。この芸能稽古に関しては本田誓子の「後水尾天皇の禁中御学問講」に詳しく³⁾、元和7年（1621）には、この芸能稽古は禁中御学問講と呼ばれるようになるという。

本田はこの学問講の成立要因として、「自らと近臣の学問教養のための修練の場を設定し、近臣などと気軽に学問教養を深めようと意図したため」と指摘しているが、学問講発足当初は摂関家などの高位者が中心であると同時に構成員の人数も多く、必ずしも「近臣などと気軽に」という状況ではなかった。発足当時の構成員は、近衛信尋や一条兼遐などの摂関家である皇族兄弟や内々衆が大部分であり、次第に公家全体が構成員の対象となっていた。学問講が収束する末期には、15人程度の近臣の集団になり、この近臣の集団が次節で述べる後水尾院サロンの主要な構成員となっていく。すなわち、学問講の中で後水尾院の周辺に親密な人間関係が形成されており、ここにサロンの萌芽がみられる。

* 京都造形芸術大学

ついで後水尾天皇の文化活動の特色として挙げられるのが立花であろう。

後水尾天皇の立花に対する情熱は熱く、特に寛永6年(1629)における立花会の開催頻度は高く、同年の7月7日禁中で催された大立花会においては49もの瓶が立てられたという。この禁中大立花会は近世初期の宮廷文化の一つのメルクマールとなっており、次のように百年後の禁中では伝説になっていた⁴⁾。

禁中大立花会を終えた後の寛永6年11月8日、後水尾天皇は、にわか明正天皇(当時7歳)への譲位を執行した。譲位の後、後水尾天皇の立花熱は冷却しはじめ、新たな文化活動へ興味が移行していくことになる。上皇という比較的自由な身になって、新たな世界を謳歌することを志向し始めるのである。

譲位後、禁裏から仙洞御所に場所を移して後水尾サロンが開花していくことになるが、禁中御学問講の末期に形成された信頼する近臣たちからなる親近的な人間関係と共に、禁中大立花に代表される文化活動への執心がサロン形成の基盤といえる。

後水尾天皇の即位から2年後の慶長18年(1613)、徳川幕府が威信をかけて造営した慶長度内裏への後水尾天皇の移徙が成った。その後この慶長度内裏は、元和6年(1616)に実現する徳川秀忠の姫君・徳川和子の入内に向けて改築工事が行われた。先に述べた禁中御学問講は御学問所や清涼殿で、立花は紫宸殿や小御所などで行われていた。

元和元年(1615)に内裏小御所の東側に泉水ができ、元和7年(1621)には、その泉水に御亭と長廊が造られた。これは小御所から東の対岸に向かって架けられた、長さ21間、約38mにも及ぶ長廊の先端に2間四方の御亭が附属するものであった⁵⁾。この御亭・橋は3月の花の盛りに完成したようで、三日三晩にわたって完成披露の無礼講の宴が催された⁶⁾。この宴では、碁・将棋・双六などに興じた後に、御学問所において御振舞があった。御振舞の後に新造の橋に出て、種々の遊びや酒宴があったことから、橋は単に部屋と部屋を繋ぐものというよりも、橋そのものが遊興の場として機能していたことがわかる。

寛永期以降本格的に展開する後水尾院サロンの遊興の場の典型的な構成は、池畔に御茶屋が複数点在するといったものである。つまり、慶長度内裏(元和期)の小御所東池庭(図1)において、

池上に長橋が繋がれていた「小御所」「釣殿」「御亭」などの建物が、文化活動の多様化していく中で、機能別に分離分散し、池畔に複数の御茶屋が配置されるという構成に変化していったとみられる。

また、先の慶長度内裏(元和期)における遊興は、30人もの大人数でなされているが、15、6人という少人数で構成される点に特徴があるサロン活動とは異なっていた。一方、活動内容に関しては盤上遊戯や船遊びといったように、後のサロン活動と相違がない。つまり、この時期の後水尾天皇の文化活動の在り方はサロンへと展開する過渡的な状況であったといえる。

図-1 慶長度内裏(小御所東庭)
(『中井家文書の研究(一)』中央公論美術出版、昭和51年より)

3. 後水尾院サロンの変容過程と特質

後水尾院サロンの実態と変遷を明らかにするために、後水尾院の事跡を収集し⁷⁾、後水尾院を中心に催された文化活動を①内容②参加者③場所の三要素について頻度調査を行った。その結果、文化活動の内容・構成員・場所それぞれにおいて、約20年ほどの間隔で特徴的に変化することが明らかになり⁸⁾、後水尾院サロンはその性格から三期に区分することができると判断した。以下、第I期から第III期へと順を追って、後水尾院サロンの変容過程を示し、各期の意義を考察する。

表-1 後水尾院サロンの文化活動の変遷

	1629	1640	1660	1680
	在位期	第I期「修業期」	第II期「円熟期」	第III期「継承期」
活動内容	禁中御学問講 寛永大立花	和漢聯句会の興隆 新造庭園での遊興	「御勝負之御振舞」の興隆 山荘御幸始まる	山荘御幸・皇子女邸宅御幸 皇子女への教養伝授
構成員	文芸	文芸+遊興	遊興	遊興+文芸
近臣衆	(皇族)近衛信尋 (公家)阿野実頼・藪嗣良 中院通村など	(皇族)近衛信尋 (公家)阿野実頼・藪嗣良 園基音など (他)相国寺僧侶など	(皇族)近衛信尋・妙法院堯然法親王・一条兼遐 聖護院道晃法親王など (公家)藪嗣良・園基音・岩倉具起など (他)相国寺僧侶・女房衆など	(皇族)後西院・妙法院堯恕法親王・聖護院 道寛法親王・品宮・新中納言局 一乗院真敬法親王など (公家)近衛基熙など(他)日厳院堯憲など
	近臣衆	同志的・師弟的	兄弟的・仲間的	家族的
活動場所	慶長度内裏	寛永度仙洞御所	寛永度仙洞御所 瓢界御殿 白責軒御殿 長谷・幡枝・岩倉御殿	寛文度仙洞御所 長谷・幡枝・岩倉御殿 修学院離宮 公家町内皇子女邸宅
宮庭庭園	第一期 大和田山荘 桂離宮	寛永度仙洞御所	第二期 西賀茂山荘 長谷・岩倉 (瓢界・白責軒御殿) 幡枝御殿 曼珠院	修学院離宮 寛文度仙洞御所

(1) 後水尾院サロンの形成 ～第Ⅰ期(1630～40年)修業期～

後水尾院サロンでは、寛永14年(1637)を頂点として1630～40年にかけて文芸活動が盛んに行われた。中でも、とりわけ和漢聯句の御会が頻繁に催されていた。この時期の後水尾院の事跡収集は『隔莫記』を主体としているため、その著者・鳳林承章が仙洞御所における和漢聯句会の御連衆であったことから、必然的に和漢聯句会の頻度が高くなったことは否めない。しかし、『隔莫記』を通読すると、この和漢聯句会の開催頻度は、寛永14年をピークにその後明らかに減少していく。その急激な盛衰を考えれば、和漢聯句会の隆盛はこの時期のサロン活動の大きな特徴と位置付けることができる。

和漢聯句とは簡略して言えば、一首の詩を複数の作者が合作する聯句が、連歌の影響を受けて連歌と合体し、漢句と和句を付けるものである。漢句を担当する「漢衆」の多くは旧五山の僧侶が担当していた。和漢聯句会の人数は通常14人程度で執筆役が2人程加わる。和歌の部分を担当する「和衆」の多くは公家であったが、「漢衆」は相国寺衆の比重が高かった。

この和漢聯句会の定番の参加者は、皇族では後水尾院・近衛信尋、公家衆は阿野実顕・滋野井季吉・藪嗣良・勸修寺経広・岩倉具起・園基音、また鳳林承章(相国寺)、雪岑梵峯(相国寺)、俊甫光勝(東福寺)、九巖中達(建仁寺)などであった。

この参加者を俯瞰してみると、そのほとんどが後水尾院の内々衆で、30代後半の院よりも年長であり、和歌・漢詩の熟練者たちである。

寛永6年(1629)における譲位に伴い後水尾院の院司衆が組まれ、四辻季継・阿野実顕・高倉嗣良などが別当になっている⁹⁾。四辻季継と藪(高倉)嗣良は兄弟で、四辻季継は、後水尾院が寵愛しながらも、徳川和子入内で不運にあった御与津御寮人の兄である。「院ノ御ヒキ衆」と呼ばれていた彼らこそ、禁中学問末期の構成員に他ならなかった。譲位目前の親密な人間関係がサロンに移行したことがわかる。

さて、この和漢聯句の隆盛という文化動向のメルクマールとして浮かび上がってくるのが、寛永13年(1626)5月13日から三日間にわたって仙洞御所において催された「御千句」と呼ばれる和漢聯句の集大成的な催しである¹⁰⁾。サロンにおける和漢聯句会の隆盛は、「御千句」という集大成を目的としていたからであり、その達成を節目に和漢聯句会は終息していったといえる。

サロン構成員については、「御千句」という偉業を達成するためにふさわしい後水尾院の先達的人物で構成されていたことが特徴である。

この和漢聯句会が催されていたのは、寛永7年(1630)に新造なった寛永度仙洞御所である。後水尾院サロンの活動は文芸に比重がおかれていたが、同時に庭園では新たな形態の遊興が始まっていた。

御茶屋において茶を喫した後に、宴遊が催される。池の中島に錦座を設けて楽宴を催し、舟に乗りながらの謡や乱舞、また板敷の舞台の上で少女の踊りが繰り広げられた¹¹⁾。周知の通り、この寛永度仙洞御所の庭園は寛永11年～13年にかけて、小堀遠州の普請によって造営された庭園である。この庭園の様子は、「(略)見只今御普請之御庭、廣大無辺之儀也。未全備、奇石佳木也¹²⁾。」という記述から、「廣大無辺」であり「奇石佳木」が見所であったことがわかる。また、

(略)御庭芍薬拝見可仕之旨聖旨有之。上皇幸于芍薬御庭。随庵尊公隨後。予亦随随庵尊公之後。芍薬珍敷花有之。御庭段々疊石。花之下鋪種々換色之石。又可乗御池之舟之聖旨有之。随庵尊公乗舟。予亦從而乗。池中一遍乗而遶御池。勝覧散気者也。上皇亦在作山之上。然而退出¹³⁾。

とも記され、御庭には「段々疊石」があり、花の下には「種々換色之石」が敷かれていたとの記述から窺えるように、寛永度仙洞御所庭園(図2)は奇抜な造形を有していた。

図-2 寛永度仙洞御所御庭絵図
(『中井家文書の研究(一)』中央公論美術出版、昭和51年より)

周知の通り、寛永度仙洞御所庭園の造形性が多くの研究者の関心を引いてきた。しかし、現在においてもなお、その造形が何から影響を受けたものなのか、また、小堀遠州の感覚なのか後水尾院の趣味かなど不明なままである。特異的な方形の護岸に関して、田中は城郭の石垣に発想を得たのではないかと推察している¹⁴⁾。また、森は整形式庭園の実現とした¹⁵⁾。

寛永度仙洞御所は万治4年(1661)1月15日における大火で焼失するが、その後新造なった庭園では池を囲っていた直線的な護岸は、自然な形態の護岸へと生まれ変わった¹⁶⁾。

前記のような庭園での遊興が繰り広げられる一方で、この時期、後水尾院は主体的活動を、和漢聯句といった文芸活動においていた。したがって、庭園での遊興を後水尾院サロンの主体的な活動とみるよりは、上皇としての新たな活動空間である仙洞御所において文芸を中心としたサロン活動が展開される中、庭園の完成により遊興的活動が可能になった状況とみるのが妥当であろう。

続く第Ⅱ期においては文芸御会が極端に減少し、遊興性の高い宴遊が頻繁に催され、宴遊のなかで文芸が繰り広げられるという形態に移行していくことから、第Ⅰ期の後水尾院サロンの活動は、和歌会などの公宴御会後の饗応が徐々に独立性を増していく状況にあったと推測される。

(2) 後水尾院サロンの展開 ～第Ⅱ期(1641～60年)円熟期～

和漢聯句会が収束した後、1650年代になるとサロン活動に新たな動向が現れ始める。文芸が変わって「御勝負之振舞」と呼ばれる遊興が活発になるのである。

於仙洞瓢界御殿、而御勝負振舞有之。予御客衆也。御人衆先日之衆、勸大公今日者出仕也。今日又有御勝負、予今日亦勝負也。御勝負済、御振舞後、御菓子共出也。(略)誹諧発句仕、御製御脇有之、誹諧七八句有之也。被催躍、(略)被出後段、被浮盃、各発謡聲也。(略)¹⁷⁾

「御勝負之振舞」は上記のような次第で記されることが多く、宴遊の中に行われた双六や十柱香などの勝負において、負方が、次の饗宴の場を設定するとともに、勝方をもてなすといったものであった。次の饗宴でも再び勝負事が行われ、同様の方法で連続的に饗応が催されていったのである。饗宴の次第は、御振舞の後に双六等の勝負の遊戯があり、俳諧や狂句を催しながら大酒宴に至るというものであった。

従来行われていた公家の典型的な遊戯である勝負事は、御会の後の後宴で催されていた。しかし、後水尾院サロンにおける「御勝負之振舞」は御会無しに、この遊興的な御振舞だけが単独で頻繁に催され、公宴御会的な立場に変わっていったという点にこの

時期の特徴がある。この「御勝負之振舞」は特定の時期(1652～54年がピーク)に熱狂的に催され、サロン活動の形態としては極めて特異である。また、この振舞においてはしばしば、勝者に賞品が与えられたことも特徴的である¹⁸⁾。

この「御勝負之振舞」においても、この時期特有な固定的構成員が浮び上がってきた。皇族では、後水尾院・青蓮院尊純・近衛信尋・妙法院堯然・一条兼遐・聖護院道見、公家集は藪嗣良・岩倉具起・園基音・勧修寺経広などであり、その他鳳林承章・雪岑梵峯、院参衆・女房衆などであった。

この構成員をみると、ほとんどが後水尾院より年少か、50代前後の同世代でもある。後水尾院は50代も後半になっており、年長者の中かなりの高齢の者がいるのも必然ともいえる。主たる特徴は、近衛信尋・一条兼遐・妙法院堯然法親王・聖護院道見法親王など、後水尾院の兄弟が主要な位置を占めていることである。公家衆は藪嗣良など長きにわたって後水尾院の信頼を得ていた者たちばかりである。

また、このサロンの構成員の特徴として院参衆の存在が指摘できる。この第Ⅱ期の頃から『隔蓐記』にも院参衆として、個人名までもが詳細に記述されるようになるが、長谷忠康・早風実種・芝山定豊・園池宗朝・梅小路定矩・池尻共孝・交野時貞などが代表的な院参衆であり、「御勝負之振舞」に参加を許され、御振舞の準備などをしていた。これらの院参衆は仙洞御所の南側に院参町を形成し、集結していた(図3)。院参衆の多くは新たに設立された新家であり、後水尾院サロンの構成員の子息でもあった。

また、明確に記述されることは稀であるが、このサロンには女房衆など女性の姿もみられた。後述する第Ⅲ期のサロンにおいては女性の割合が高くなることから、後水尾院の文化活動では女性の存在が大きかったと考えられるが、第Ⅱ期においては、後水尾院の姉である清子内親王をはじめ、京極御局・新中納言御局といった後水尾院の側室と、その女房衆である長橋御局・三位御局などが、常時サロンに参加していたようである¹⁹⁾。

寛永17年(1640年)以降は、後水尾院と新中納言御局との間に多くの子供が誕生している。新中納言御局は園基音の長女で、園基福・基賢の姉であり、後水尾院サロンにおいては園一族が活躍する。後水尾天皇の在位時には御と津御寮人の四辻家が同様に後水尾天皇に重用されていた。このように後水尾院サロンの構成員には、後水尾院の寵愛を受けた女性の存在が大きく影響していた。

このサロンを俯瞰してみると、後水尾院は兄弟や朋友的な仲間たちとゲーム遊びに明け暮れるなど、非常に享樂的なものであったといえる。第Ⅰ期のサロンが年輩の熟練者に囲まれながら学問の達成を志向していたのに比べると、この時期のサロンには精神的な緊張感がほとんど感じられない。

寛永20年(1643)に明正天皇から後光明天皇へと皇位が継承された。後光明天皇が即位し、明正新院も存在することによって、禁中での行事を任せられるようになり、責任が分散され身軽になり、遊興的行事の頻度が増したとも考えられる。後水尾院の兄弟また皇子・皇女の人数もこの時期にピークを迎えるこの時期が、後水尾院にとって最も幸せな時であったに違いない。

この「御勝負之振舞」は、承応4年(1655)以降ほとんどみられなくなる。その原因は前年の9月20日に、最愛の後光明天皇が22歳の若さで亡くなったことにある。後水尾院は後光明天皇に対して過度な期待を擁していたようであり後光明天皇を失った院の落胆はあまりにも大きく、遊びに興じるなどできなくなったのであろう。

この「御勝負之振舞」が多く催されたのは先の寛永度造営の仙洞御所ではなく、「瓢界御殿」と「白賁軒御殿」という二つの後水尾院の別邸であった。

「瓢界御殿」における遊興は正保5年(1648)を初見とし²⁰⁾、仙洞御所に隣接した東南部に位置していた。瓢界御殿の東面は寺町通りに面しており、周辺には連続して皇女たちや院参衆の屋敷が建てられていた(図3)。一方、「白賁軒御殿」は慶安4年(1551)が初見で²¹⁾、当初公家町内、中筋通りの一本東の二階町通りに面し、大聖寺殿の東南に位置していた。これらは松井・後藤に詳しく²²⁾、別邸御殿の敷地は200坪余りと推定されるといい、仙洞御所は建物だけでも3,500坪余りあったことに比すれば、さほど大きな空間ではなかったことがわかる。「御勝負之振舞」は、ほとんどがこれらの別邸で行われていた。このことから、おおむね歌会や年中行事など表向きの公的行事を仙洞御所で行う一方、私的な遊興のためにこの別邸を構えたと考えられる。また、仙洞御所での生活も20年が経過しており、新たな環境を求めたのも必然であろう。先述したように、後光明天皇の崩御により、この享樂的遊興は承応4年(1655)以降ほとんどみられなくなる。瓢界御殿は寛文10年(1670)頃、また、白賁軒御殿に関しても、延宝年間までその存在が確認されるが、両殿における後水尾院の使用は、寛文7年(1667)以降、ほとんど記録に現れなくなる。

(3) 後水尾院サロンの変容 ～第Ⅲ期(1661～80年)継承期～

後水尾院の晩年(70歳代)にあたるこの時期の後水尾院サロンは、後水尾院とその皇子女たちで構成されていた。それは、後水尾院の皇子女たちが成人期に入り、後水尾院の御相手を勤められるぐらいに成長していたことが主たる原因であろう。

1650年代から後水尾院は宮門跡や公家町内里坊、皇子女邸に御幸をし始め、1660年からその頻度が増していくことがわかる。また、同時に禁裏・新院・本院・女院に加え修学院離宮への御幸といったように、後水尾院の活動圏は拡大していく。

文化活動圏が広がる一方、サロンの構成員はほとんど固定されていた。後西院・大覚寺性真親王・妙法院堯恕親王・品宮・聖護院道寛・一乗院真敬親王・青蓮院尊證親王・大聖寺文享女王とほとんどが皇族であり、近衛基熙や新中納言局・日厳院堯憲の比重が大きい。堯恕法親王・常子内親王(品宮)・真敬法親王・尊証法親王・靈元天皇永享女王の母は新中納言局であり、サロン構成員はほとんど新中納言御局を母とする兄弟たちであった。日厳院堯憲は新中納言の父・園基音の弟である。また、園家から分家した東園家が勢力を伸ばすなど、後水尾院サロンに関係が深いほど宮廷内における地位が確保されていくことになる。

後水尾院は、公家町内の禁中(靈元天皇)・本院(明正院)・新院(後西院)・女院(東福門院)・新中納言邸・近衛邸(近衛基熙・品宮)・二条邸(女五宮賀子内親王)・後光明天皇女一宮局・妙法院里坊(妙法院宮堯恕法親王)・一乗院里坊(一乗院宮真敬法親王)・青蓮院里坊(青蓮院宮尊證法親王)・朱宮邸(林丘寺開基)・陽徳院(永崇女王)の寺と大聖寺宮(永享女王)の庵などを数日おきに廻っていた(図3)。

皇子女邸宅への御幸の様子をみると、食事の後、二階から通りを行き来する人々を見物し、双六勝負などに興じている。他もほぼこのような内容の御幸であったが、立花・香・舞・双六・貝覆などでもてなすのが常であった。典型的な王朝の遊びが繰り広げられる中で、「物見格子から外を見る」という特異な行為がなされていることが注目される²³⁾。

ある時は、近衛邸の修復工事により新しく御茶屋と格子の間が完成したので後水尾院の御幸があり、後水尾院は格子越しに人通りをしばらく御覧になった。近衛邸においては、後水尾院はわざわざ町通り(今出川通り)に面した側に物見の格子をつけることを命じたのであった。その他、大聖寺においては格子から下を通る十夜参りの人々を見物し、朱宮邸においても格子にてしばらく人通りを見物したという。この公家屋敷における物見格子に関しては松井に詳しく、物見格子の普及時期としては、寛文をあまり

図-3 後水尾院別邸・皇子女邸宅配置図
(延宝3年公家町絵図(京都府立総合資料館蔵)より作成)

さかのぼらない頃からのことで、延宝から元禄に至って徐々に普及したとしている²⁴⁾。

この物見格子からの世俗見物は、宮廷と大衆との物理的距離感の短縮といえるであろう。この第Ⅲ期からは、最上層貴族である皇族が市井に下屋敷などを持ち始め、元禄期に入ると頻繁に各下屋敷へ上層貴族たちが御幸するようになる。

このような皇族の行動は、慶長・元和期における八条宮智仁親王のそれに比べて宮廷と大衆との距離感が近くなっていたことは明らかである。寛永文化の性格である王朝文化の解放を経て、宮廷人が大衆文化を楽しむ時代が訪れ、宮廷文化が拡散し、その所属性が曖昧になっていったのも自然な時代の流れであろう。

第Ⅱ期においては遊興的活動に終始していた後水尾院サロンだが、第Ⅲ期に入ると再び文芸活動が興隆してくる。これは、後水尾院の皇子女が成長するにつれ、後水尾院が子供たちの教養育成に力を注いだためと考えられる。明暦3年(1657)後西院への古今伝授以降、皇子女を対象とした後水尾院の教養の伝授ともいえる文芸活動が目立ってくる。それは後水尾院サロン第Ⅰ期のような、自身の修練のためではなく、教育指導的側面をもっていたという点に第Ⅲ期における文芸活動興隆の特質を見出せる。

禁中や新院御所における歌会だけでなく、後水尾院は自身の仙洞御所や皇子女邸に赴いて源氏物語などの古典講釈会をも催していた²⁵⁾。こういった歌会や講釈会においても、第Ⅲ期固有の特質が表れている。後水尾院は、天皇や新院に歌会を開くことを奨励し、自らその評点を行ったが、行事をもっと楽しくするためにしばしば御振舞をし、歌会や講釈会の後やその他の集まりで籤引や双六や懸物香などを催し、賞品として歌仙の短冊や御製の短冊、宸筆の古歌や色紙などを与えていたのである²⁶⁾。

第Ⅱ期に比べて文芸の機運が高まってきたのは確かだが、表面的には典型的な宮廷の文芸活動であっても、その実態は父親が子供たちにご褒美を用意して勉学に励ませるといった、極めて家族的な世界であったといえよう。第Ⅲ期における後水尾院サロンは非常に家族的なものであったことが、サロン自体の縮小を表して

いるといえる。

第Ⅲ期の後水尾院サロンの活動の場は、第Ⅱ期からさらに拡大・多様化していく。第Ⅱ期で頻繁に使用されていた瓢箪御殿・白真軒御殿はすでにサロンの活動の場としては機能しなくなっており、先に述べたように皇子女邸ならびに門跡里坊への御幸が頻繁になっていた。

後水尾院の山荘御幸はすでに、正保4年(1647)頃から行われており、その行き先は、長谷・岩倉・幡枝の三箇所の山荘であった。これらの山荘に関しては多くの先行研究があり²⁷⁾、また、岩倉御殿と幡枝御殿に関しては西和夫の論考により、その位置や建物の詳細が明らかにされている²⁸⁾。

長谷には元々聖護院の別荘があり、従来から宮廷貴族に使用されていた。後水尾院の母・新上東門院も度々長谷へ隠居的に御幸しており、智仁親王も女院を見舞いに長谷を訪れている。このように長谷は古くから宮廷貴族の御幸先であったことから、その周辺の岩倉や幡枝に範囲が拡大されていったとみられる。

修学院離宮では花見や茸狩りなどをし、壽月観で御膳をした後、上の茶屋では、池の周辺に点在する複数の御茶屋めぐりをしながら舟遊びに興じていた。

法皇修学院へ御幸にて御供申す。朱の宮の御方、円照寺殿、光照院殿もなる。朱の宮の御茶屋まで行く。みなみなそこにならしましてそれより御茶屋へ御供す。先づ壽月観にてしばらく景を御覧にて御庭の土筆とらせられ、さて上の御池へなる。隣雲、洗詩台、窮遠、あなたこなたあそばされ、止々斎にて御屋の小漬あがり、みなみなも御相伴す。それ過ぎて御船にめさる。所々葉まじりに桜咲き、山吹も少し有り。山にはつつじ咲き、見事さうつくしさ、いふばかりなし。水の上ものどかに、野の景色とりどりの景おもしろき事どもなり。一、二へん御舟めぐり、さて又壽月観へ還御にて夕方御膳参る。おなじく御相伴なり。御膳過ぎておつけ還幸なる。みなみなは又朱の宮の御茶屋へ行く。同道して帰る。(略)²⁹⁾

宮廷サロンの山荘遊びは、このような複数の茶屋めぐり、船遊び、御殿にての御膳、花見、茸狩りなどが典型的な要素になっていて、それらの行為が可能な山荘造りがなされた。

修学院離宮を中心とする後水尾院の山荘御幸は、初期は一大連隊を率いた壮大なものであったが、主に春秋の季節の遊びを楽しむものであり、それは家族と共に時間を過ごすという意味合いが大きかった。これは、第Ⅲ期ならではの特徴といえよう。

4. 結論—後水尾院サロンの文化活動からみた庭園の役割と機能

後水尾院サロンの活動場所の変遷を俯瞰すると、活動内容の変化、すなわち遊興の比重の高まりと共に、活動場所が増加することが特徴である。第Ⅰ期は仙洞御所、第Ⅱ期は仙洞御所と別邸そして山荘群、第Ⅲ期には、仙洞御所と修学院離宮を含む山荘群に加えて数多くある皇子女邸及び門跡里坊がサロンの活動場所であった。

次に、それぞれの時期における活動内容の質的な推移をたどることによって、活動場所としての庭園がどのように機能していたのかを(表1)を参照しながら考察する。

後水尾院サロンの第Ⅰ期における活動は寛永度仙洞御所で展開されたが、この時期には和漢聯句会を主とする文芸活動に比重が置かれ、その一方で庭園における遊興も活性化した。

第Ⅱ期に入ると、新たなサロン活動の場として公家町内に瓢箪御殿と白真軒御殿などの別邸が求められ、私的な室内遊興が仙洞御所から分離する。これらの別邸では、「御勝負之御振舞」と称された特徴的な享楽性の高い遊興が繰り広げられた。また別邸で

の遊興には、皇族兄弟や院参衆といった後水尾院と親密な関係にある人々が集っていたことから、後水尾院にとって別邸は私的な空間であったといえる。この時期、仙洞御所では第Ⅰ期に引き続き庭園での遊興が行われてはいたが、室内活動として、年中行事など公的、また懺法講といった宗教的な活動に加え文芸活動なども行われていた。そういった状況から、第Ⅰ期に仙洞御所で行われていた私的な室内遊戯が分離して、別邸で行われるようになったと考えられる。

このように、仙洞御所では、公的行事と共に公的あるいは私的な庭園での遊興が、別邸では私的な室内遊興がなされるという、活動場所の機能別分離が行われたと捉えられる。一方、第Ⅱ期の半ばから後水尾院の岩倉・幡枝・長谷への山荘御幸が始まる。また、遊興性の増した第Ⅱ期頃から、八条宮智忠親王の第二期桂離宮³⁰⁾や一条兼遐の西賀茂山荘、良尚法親王の曼殊院庭園などが造営され、宮廷庭園が興隆する。

第Ⅲ期において、後水尾院の皇子女が成人すると、後水尾院の皇子女邸への御幸が頻繁化するなど、サロン活動の場はさらに多様化し、場所ごとの活動がそれぞれに趣向を凝らして展開していくことになる。そこでは、別邸と同様に双六などの室内遊興が行われていたが、「御勝負之御振舞」という言葉はほとんどみられなくなる。この第Ⅲ期には瓢界御殿と白貫軒御殿の使用は極端に減少していることから、遊興の内容の変化と共に、室内での遊興の場として機能していた別邸の役割が、皇子女邸及び門跡里坊などへ移行したとみてよい。また、この時期には遊興だけではなく、後水尾院による古典講釈など教養の伝授を目的とした文芸活動も行われていた。遊興は季節の景を楽しみながら庭内の御茶屋でなされることも多く、後水尾院の御幸先では庭園を使用する頻度は増していった。また、「御勝負之御振舞」に替わりこの時期には、物見格子からの市井見物という特徴的な遊興もみられるようになる。

そして第Ⅲ期に至って修学院離宮が完成する。サロンの活動範囲はさらに広がり、郊外における遊興が盛んになる。

このように、後水尾院サロンの第Ⅰ期から第Ⅲ期への活動の場所の推移には、後水尾院の文化活動が分化される反面、それぞれ異種の活動を可能にする場が生み出されており、活動場所の多様化の及び機能別分離という特質が見出される。

後水尾院サロンの活動の比重が遊興に移るに従って、後水尾院の御幸先でも庭園を使用する頻度は増した。庭園は遊興の場として独立発展し、郊外に営まれた山荘では、山上の御茶屋から眺望し、池周辺に点在する複数の御茶屋をめぐりながら様々な景を楽しむ、そして舟遊びをするといった山荘型庭園として独自の様式が構築された。その完成型が修学院離宮といえよう。

後水尾院没後、中心軸を失った宮廷文化サロンは瓦解していく。宮廷庭園はサロン活動の場として宮廷文化サロンの興隆とともに充実し、その終焉とともにサロン活動の場としての役割を終え、時代は大名庭園の興隆に移る。後水尾院没後の宮廷庭園と宮廷文化の状況に関しては別稿に譲る。

補注及び引用文献

- 1) 寛永文化に関しては、林屋辰三郎（1953）：寛永文化論：中世文化の基調：東京大学出版会など、特に熊倉功夫（1988）：寛永文化の研究：吉川弘文館によるところが大きい。
- 2) 斉藤英俊（2000）：近世宮廷文化サロンの文芸と遊興の場：茶道学大系第6巻茶室・露地：淡交社、瀬川淑子（2001）：皇女品宮の生活『无上法院殿御日記』を読む：岩波書店など。
- 3) 本田慧子（1977）：後水尾天皇の禁中御学問講：書陵部紀要第29号：

宮内庁書陵部

- 4) 佐伯太註釈（1973）：槐記註釈：立命館大学出版、316頁
- 5) 藤岡通夫（1987）：京都御所：中央公論美術出版
- 6) 『時慶卿記』元和7年3月9日条。次いで『泰重卿記』元和7年3月10日条、元和7年3月11日条（1998：史料纂集、統群書類従完成会）などから、連日無礼講の御振舞がなされた様子が窺える。
- 7) 特に後水尾院の文化活動の記述が多く得られる『隔賞記』『第日本史料』『无上法院殿御日記』『資勝卿記』『泰重卿記』などを中心とした。
- 8) 頻度集計は日記から得られた項目を数量的にはかり、特に特徴的であった傾向があらわれた。
- 9) 『泰重卿記』寛永6年11月8日条
- 10) 『隔賞記』寛永13年5月13日、仙洞御千句始、自丑剋、始、到未剋、而三百韻済。午時白御帷子一重、連衆十三人・執筆兩人拝領。（略）同14日、四百韻、自丑剋、終酉下剋。連衆十三人。（略）同15日、三百韻、自丑剋、終申剋。（略）
- 11) 『隔賞記』寛永13年9月18日条。午時、仙洞御口切、賜官焙。御客衆近衛殿・妙法院・四辻大納言中院前大納言・飛鳥井中納言・滋野井中納言・姉小路宰相・小川坊城宰相・余而已。於御茶屋、有御茶三種也。茶堂勸修寺中納言、御書院・御茶屋方々御師、驚凡眼者也。御書院之書院大形如此。三幅一對者牧溪筆斂。中者寒山十得、兩脇龍虎。三具足三頭共二銀子也。奥之書院之棚二有冠棚、色々被飾也。大棚二有金子之大香爐、有御古筆。御茶屋、凝絶布袋贊墨跡被掛之、棚染漬御香爐有也、有古小箱也。於御茶屋、御宴遊。将月上東山、則被設錦座於池上之山上、鼓吹歌聲。其後被移御座於官船。於船中、小歌謡、各乱舞。其後庭上五間四方舖戸板、小女之躍移数剋。及半鐘過、而歸于北山矣。（鹿苑寺藏：1997：思文閣出版）
- 12) 『隔賞記』寛永12年7月19日条
- 13) 『隔賞記』寛永13年4月18日条
- 14) 田中正大（1967）：SD選書23 日本の庭園：鹿島出版会、248頁
- 15) 森蘊（1966）：小堀遠州の作事：奈良国立文化財研究所学報第18冊、145頁
- 16) 中井家文書の研究（一）：寛文度の仙洞御所庭園の計画図面を参照。
- 17) 『隔賞記』承応2年10月2日条（鹿苑寺藏：1997：思文閣出版）
- 18) 『隔賞記』慶安5年9月5日条（鹿苑寺藏：1997：思文閣出版）
- 19) 『隔賞記』慶安5年3月28日条（略）仙洞今日於一乘院法親王御門主、而御幸。（略）今日仙洞之御供之衆、聖護院法親王御門主・准后様・京極御局・新中納言御局・長橋御局・三位御局也。（略）（鹿苑寺藏：1997：思文閣出版）
- 20) 『隔賞記』正保5年9月1日条。当初は寺町御殿と称されていた。
- 21) 『隔賞記』慶安4年12月12日条。当初は二階町御殿と称されていた。
- 22) 松井みき子（1996）：寺町御殿と瓢界御殿（後水尾院の公家町別邸上）：日本建築学会計画系論文集 479号、日本建築学会（1996）：二階町御殿と瓢界御殿（後水尾院の公家町別邸下）：日本建築学会計画系論文集 486号、日本建築学会
- 23) 『无上法院御日記』陽明文庫藏。寛文6年8月16日条など。
- 24) 松井みき子（1993）：「格子」と物見：宮城学院女子大学生活科学研究報告 第25巻
- 25) 『无上法院御日記』陽明文庫藏。寛文12年11月28日条など。
- 26) 『无上法院御日記』陽明文庫藏。寛文12年11月28日条など。
- 27) 森蘊（1954）：修学院離宮の復元的研究：奈良国立文化財研究所学報第二冊など。
- 28) 西和夫（1998）：後水尾院の山上の茶屋 寛永文化のネットワーク『隔賞記』の世界：思文閣出版
- 29) 『无上法院御日記』陽明文庫藏。寛文11年3月2日条など。
- 30) ここでは便宜上、八条宮初代智仁親王造営を第一期桂離宮、二代智忠親王造営を第二期桂離宮とする。